

## 編集デスク <34>

水上勉が「オール読物」10月号に推理競作ベスト5の1編として「黒い産室」を書いている。この作品は、作者あてのある女性の手記の形式をとったものである。「私」なるこの女性は東京近県T市の大学病院の看護婦であり、インターンの蓮田先生に暴力でおかされその情婦になっている設定である。

蓮田先生はぼろ儲けのできる産婦人科医になって病院を建てる夢を持っている。その夢を実現するために、T市に偽名で立川産婦人科医院を設立する。「私」を使って診療はやりだす。そのやり方が問題なのだが、子供の欲しい不妊症の社長婦人に資金を出させ、麻酔分娩の妊婦をごまかして得た新生児を300万円で社長夫人に売りわたし資金を手に入れたというわけである。

これは全くひどい小説である。こ

れに対しては、さっそく「日本医事新報」(38.10.5)紙上に、小田原市の勝田正泰氏の「拝啓 水上勉様」が出た。勝田氏は産婦人科医であるから、詳細にわたって水上勉の記述の誤りを指摘し反省をうながしている。その要点は次のようである。1) 蓮田医師が国家試験後インターンになっているのは逆である。2) 蓮田

### フィクションと素材

——長谷川 泉——

医師が豊橋の予備士官学校から、大学医科に進学したのは不可能なことであった。3) 転入学が可能としても、算術上、この事件のあった時はまだ学生のはずである。4) 蓮田医師が偽名で産婦人科医院を開業したなどばかげたことはあり得ない。5) 産婦人科の分娩台を床屋の椅子に似ているというのは実情を知らなすぎる。6) 妊娠9カ月でまるまる肥った

子供が生まれるなど非常識である。7) 開業医が昭和23年頃一人の看護婦を相手に麻酔分娩をやっていたのはおかしい。その他医学的な記述誤りが数多くあり、そのようなでたらめの上に、とんでもない産婦人科医をでっちあげ、医師の常識では考えられない犯罪をおかさせているという批判である。

小説だからフィクション(仮構)であってよいが、そのフィクションを成立させる素材は正確でなければならない。森鷗外が史伝でとったような、一字といえども根拠のない、浮わついた文字はないというような厳正な態度を小説に求めることは無理であるとしても、医師と看護婦に対する不信を与えるような小説は望ましくない。産婦人科医のあり方への諷刺的な意味が作者にあったとしても、社会的には問題であろう。

水上勉たるもの「拝復」が必要である。



## BBankの輸液剤

### 血漿増量剤

マクロデックス-D-BBankは、A.B. Pharmacia (スウェーデン・ウプサラ) から供給される clinical dextran-substance を主原料に用いています。

マクロデックス-D-BBankは デキストランの6%含有の等張糖液で血漿と同等のコロイド浸透圧と粘稠度をもち循環血液量と血圧を即時に回復し、その後48時間持続します。

マクロデックス-D-BBankは ショックの予防と治療に最適な輸液剤です。

# マクロデックス -D-BBank

旧名 デキスト・デキストラン液-BBank

500ml ヴァイアル入

薬価基準 500ml 1管 ¥1,145

株式会社 日本ブラッド・バンク 大阪市城東区蒲生町3丁目1番地

文献贈呈